学力づくりの最前線！

学力の基礎をきたえ どの子も伸ばす研究会ニュース

学力研の広場

ホームページアドレス http://gakuryoku.info/

NO. 356

2024. 11. 2

学力研発行

常任委員長 岸本ひとみ

郵便振替 00920-9-319769

高学年ともなると、国語や算数で100点を取るのはなかなか難しいです。ところが、社会科は案外簡単に100点が取れる教科です。

子どもたちの社会科学習へのモチベーションを高める意味でも、社会的知識を増やす意味でも、「問題づくり」という方法で知識を整理させ、暗記させることはとても有効です。

まず、「問題づくり」のページはノートの後ろから始めます。ページを縦に折って、いちばん上に単元名と項目を書き、左側に問題、右側にその答えを書いていきます。

このやり方は、自分で教科書を読み、教科書に書かれている内容を、自分で問いと答えにしていくのです。

初めはとても難しくて、抵抗を感じる子が多いので、授業中に手ほどきしていきます。みんなで作った問題を発表し合い、答えを見つけていきます。最初は、問題がやたらと長い子や、答えが教科書の丸写しみたいな子がたくさんでてきますが、気にしないで続けます。すると、そのうちに隣の子と見比べたりして、少しずつうまくなっていきます。

宿題に「問題づくり」をさせておいて、授業のはじめに全員立たせておいて質問し、答えられた子から座らせていくと、教師の発問のしかたをまねて、問題づくりがうまくなっていきます。

※久保齋『子どもを伸ばす一斉授業』(2006.7小学館) の「問題づくり」で、社会科満点大作戦！」です。

今回は、子どもたちにテストでいい点をとらせるための教師の取り組みを特集しました。（荒井）

CONTENTS

◇特集　テスト満点大作戦◇

準備力をつけて満点をとる　宮本　哲・・・・・・・・・・　2
わたしのテスト対策と「週末の家庭学習情報」　鈴木基久・・・・・・・・・・　4
一年生でも「みんなで百点満点大作戦」　吉田雅直・・・・・・・・・・　6
テスト満点大作戦～つけた力を確かめる～　根無信行・・・・・・・・・・　8
言語化する大切さ　丸小野聡暢・・・・・・・・・・10
テスト満点大作戦～１年生編～　岸本ひとみ・・・・・・・・・・12
テストはチーム戦　加藤英介・・・・・・・・・・14

◇連載◇

「どの子も伸ばす」を本気で考える㉝「意欲格差」に負けない！公立小学校へ　岡本美穂・・・・・・・・・16
考える力をつけるための授業の組み立て方⑫　□が脳を作る　荒井賢一・・・・・・・・・19
社会科（歴史）授業力アップ講座㉒ 指導法研究④　深澤英雄・・・・・・・・・21
「先生のための学校」誌上開校　久保　齋・・・・・・・・・23
第18期・学力研・先生のための学校・第３回の報告　加藤英介・・・・・・・・・25
局長・常任委員長だより　・・・・・・・・・28
学力研カレンダー　・・・・・・・・・・・29

準備力をつけて満点をとる

大阪教育サークルはやし　宮本哲

「日々話す事」

「テストは、それまでの準備力（努力）が大切です。全く準備をしないでテストを受け、たまたま百点を取れたとしましょう。これは、本人の力になっていません。逆に自分は天才だと勘違いして後で痛い目にあいます。低学年時に学習の理解の早い子が満点をたくさん取っていても高学年になって準備力がついていない子はどんどん落ちていきます。宿題忘れをする、宿題を適当にする、字を丁寧に書かないなどの当たり前の習慣がついていなければ満点をとることはできません。だから普段から学んだことを復習することやていねいに物事に取り組むことなど、当たり前のことを当たり前以上にする習慣をつけることが大切です。これが学習したことを身に付ける準備になっています。

この準備力を身に付けることが点数をとるより大切なのです。小学校のうちに準備力を身に付けていると中学校、高校、大学、社会人になってもきっと役にたちます。だからできるだけ早く準備力が身につく行動をしていきましょう。」

このようなことを何度も子どもたちに話しています。どんな力も何度も繰り返すことで力が少しずつついていき、本物の力になっていきます。

また、テストの前にテスト勉強をたくさんして準備をしっかりしてきた子が、満点をとれない事もよくあります。そんな時は

「自分の分からないことが、分かるようになってよかったね。この間違いをしっかり理解したら、また賢くなって力がついていくね。テストは、受けた時の自分の力だから、自分の弱点を知れたことで確実に賢くなるね。」このような話をすることで次につなげていきます。そして、そうやって努力を積み重ねった結果、満点が取れた時は、六年生でも大きな声で「やった～」と言いながら、満面の笑みでガッツポーズをします。そんな子どもたちの姿を見ることが好きです。

だから、私は、満点をとる結果よりもその過程を大切にしています。

「満点大作戦」

【漢字小テスト】

漢字は、漢字スキルを教材として使用しています。基本的には、毎日、朝の１０分間の朝学習の時間に漢字スキルをしています。方法は、

①音読。新出漢字の音読み、訓読み、使い方の例、部首、画数、熟語などを声に出して読みます。

②机の上で画数を唱えながら、漢字が見えるようになるまで指書きをします。

③１ｍｍもずれないようになぞり書きをします。

④見本を見て丁寧に書きます。

⑤覚えているか確認するために空書きをします。覚えていなければ、指書きをして覚えたら、空書きで確認します。

⑥一日にだいたい五文字進みます。最後にこの五文字を全員で画数を唱えながら空書きをして私がチェックをします。
⑦家庭では、まずノートに読み仮名をつけ、漢字を書いていきます。覚えていない漢字は、指書きをして覚えます。
⑧漢字テストの時は、まずテスト問題と同じ問題を解いてから、本番のテストをします。この方法をすれば全員がほぼ満点をとれるようになります。

このようにしても漢字を覚えることが苦手な子がいます。その子たちには、休み時間や放課後など、隙間時間に毎日、新出漢字を出します。出されたらその場で画数を唱えながら空書きをします。できていたらたくさん誉めます。

テストの時に新出漢字を使った熟語を書いていたら点数がアップすることを全員に伝えています。漢字を覚えるのが早い子たちは、二百点や三百点をとります。自分の最高記録を出すために多くの熟語も覚えています。

【漢字大テスト】

漢字の小テストで満点をとっていてもいきなり大テストをしたら、点数が伸びません。そこで準備力を高めるために、テスト日を子どもたちと話し合って決めます。テスト日が決まったらテスト範囲を知らせます。子どもたちは、宿題や給食の待ち時間、休み時間などに取り組み始めます。たくさんの努力をしている子をたくさん誉めます。

この期間は、国語の授業の最初の時にお隣や班で漢字の問題を出し合って空書きで書いてあっているか確かめる時間を数分取ります。

ここでも小テストと同じように漢字を覚えるのが苦手な子には、色んなときに、いろんな場所で問題を出していきます。それを見て子どもたち同士でもやっていました。

当然、大テストでも熟語の点数は入るので百点を超える子が続出します。

【社会テスト】

この時期の六年生の社会は、人物と出来事が多く出てきます。陸奥宗光、小村寿太郎、伊藤博文、日清戦争、日露戦争など。歴史学習は、必要最低限のことは、覚えていかないと、どのようにつながっているのか、全く見えてきません。つながりが見えてくると、今の自分があるのも、こういう事があったからなんだと、自分の生活にもつなげて考えられるようになります。ですから、覚える時間をとる必要があります。覚えるには繰り返すことが大切です。

社会のテスト範囲は、単元の学習の中頃に伝えています。

社会の時間の始めの三分間は、ペア、もしくは班で問題を出し合っています。その活動が終わったら、先生クイズです。先生クイズは、テストに出てくる問題を出しています。(子どもたちにはそのことを伝えていませんが、なんとなく分かっている子は、先生の出す問題をメモして聞いています。)

そしてテスト前日は、久保先生がしていたように、社会ノートにテスト問題を作り、答えを書いてくる宿題を出します。テスト前にその問題を班で出し合いながら、さらに覚えているか確認していきます。

どのテストもそうですが、人と比べる必要はないと言い聞かせています。前回の自分を超えることを目標にしなさいと言っています。そのために日々の準備力を高めていきなさい、という話をよくします。

わたしのテスト対策と「週末の家庭学習情報」

鈴木基久

子どもたちが楽しく学校生活を送るためには、大切なことは二つあると考えている。一つ目は、安心できる居場所作り、もう一つは授業が分かるということだ。友達との関係がどんなに良好だとしても、授業が分からないのであれば、楽しく学校生活は送れないと思う。

授業内容が理解できているかの一番分かりやすい指標は、テストだと思う。テスト結果が良ければ子どもは喜び、保護者も安心する。そして教員も職責を果たしたことになる。つまり、子どもたちがテストで良い点を取れば、子どもも保護者も教員もみんなハッピーになれるとも言える。みんながハッピーになるために私がしていることを紹介する。

私はテストに向けてしっかりと準備（テスト勉強）して、テストに臨む子どもにしたいと思っているので、１週間くらい前にテストを行うことを知らせている。（抜き打ちテストはしない。）しっかりテスト勉強をしたから良い点数がとれたという経験が、次の学習への意欲につながると考えているためだ。

漢字のテストでは、出題する漢字を知らせてしまうこともある。漢字が苦手な子でも、練習しておけば点数が取れるようにしたいからだ。

計算ドリルは、授業の進度に合わせてできるところを進めていくことになっているので、人によってペースが違う。期日までに課題を計画的に進める力がつくこともねらっている。テストまでに、その単元の計算ドリルを終了しなければ、学習を終えられていないと判断され、テストを受けることはできないことになっている。そのため、テストまでには全員がドリルを終えている。

同僚でも算数ドリルの〇つけを全てしてあげている先生がいるが、子どもが自分で〇つけをして直すという学習の機会を奪っていることになると私は考える。だから自分で答え合わせと直しをするように求めている。これは、自分のための学習であることを意識してほしいからで、２年生でもできた。

計算ドリルが終わったら、教科書の単元末の練習問題や、うそテストで力試しをする。

これまでの子どもたちの様子を見ていると、計算ドリルへの取り組みが遅くなってしまった子は、うそテストにしっかり取り組めずに練習不足の状態でテストに臨むことになった。だからテストの点数も良くなかったことが多かった。

計算ドリルに取り組む時間は、授

業中にも取っている。どんどん進む子は、集中して取り組み、休み時間や家庭学習でも行っている。一方、遅くなってしまう子は、集中力が続かないタイプの子と理解が十分ではないタイプの子がいるように思う。理解が不十分な子へは個別に指導したり、学習支援員にサポートしてもらったりしている。

最近実施した「円と球」のテストでは、知識理解で満点１４人、９０点台４人、８０点台５人、７０点台１人、６０点台３人だった。思考判断については８０点が最も多い分布だったので、みんなハッピーにはまだ遠い結果だった。

「週末の家庭学習情報」

私の勤務してきた小学校では、学級通信を十年以上見たことがない。つまり学級通信を出すという文化が失われている。

コロナ禍の休校を経て、学校が再開したころ、グーグルアカウントが児童に与えられた。私は、次に休校になったときに学校がオンラインで情報発信しないと世間からバッシングを受けることになると心配した。そのため、日常的に保護者に対してオンラインで情報発信をしようと考えて、「週末の家庭学習情報」を投稿するようになった。

投稿の内容は、今週の学級・子どもたちの様子、来週のテスト情報、自主学習のおすすめ情報などである。学級通信がなくなった状況で、保護者に対して定期的に情報発信することができることになったので、少しでも良いものにしようと、懇談会で保護者から意見を伺ったり、年度末にアンケートを取ったりした。

アンケートでは、８割から９割の保護者が「週末の家庭学習情報」が役に立ったと回答した。家庭でのサポートをいただくためには、情報発信が必要で、情報発信することで担任の考えを知っていただく機会になり、さらには信頼を得ることにもつながると思っている。

転勤した今年度は、５月から投稿を始めたいと思っていたが、前例がないということで学年主任者会議が開かれた。投稿する学年とそうでない学年があるのはどうかと議論になったが、管理職の理解をいただき７月から投稿を続けている。

１０月の「先生のための学校」で久保先生が、コモン（共有財産）としての学級の話をされた。

「教育は常に不十分なもの。教師が全てを請け負ってはダメ。コーディネートして子どもの力を借りて、親の力も借りて共有財産としての学級を良くしていかなければならない。」

「週末の家庭学習情報」ですべての家庭からサポートが得られるとは期待していない。でも、情報があればそれを生かしてくれる保護者も必ずいる。学習を自分で進める力や集中力を高めながら、何事もしっかり準備できる子どもたちを育てていきたい。

一年生でも「みんなで百点満点大作戦」

大阪　吉田雅直

私が学力研で学んだ大切なことのひとつに「子どもたち全員に百点を取らせる」ことへのこだわりがあります。それまでは「教師が教えたことを、子どもたちがどこまで自分のものにできたか」をはかるのがテストであり、テストの点数は基本的に子どもたちの責任だと考えていました。つまり、教師の仕事は「教える」ところまでであり、「できるようになったかどうか」は子どもたちの「努力」の問題であると考え、平気で低い点数をつけ、まちがい直しで「百点」にすればいいと考えているようなところがありました。

この傲慢な考え方を根底から覆してくれたのが学力研であり、久保先生の「百点満点大作戦」だったのです。子どもたちはテストによってランク付けされるために学習しているのではない。どの子も「できた」「わかった」という喜びを感じたくて学習しているのであり、「どの子にも百点をとらせる」ことは教師の責務であると考えるようになりました。つまり、六十点しか取れなかった子がいたとすれば、それは教師の指導が六十点だったと考えられるようになったのです。それからは、どの学年を持っても、「どうすればどの子もわかる授業ができるのか」「どうすればどの子にも百点を取らせることができるのか」という発想で、教材研究や授業づくり・教材づくりに取り組んできました。

「テストはできないところを見つけるためのものなのだから、そんなに百点こだわらなくてもいいのでは」と思われるかもしれません。しかし、子どもたちは「かしこいから百点をとる」のではありません。「百点をとらせることでかしこくなる」のです。まちがい直しで百点にしてもらった答案では、子どもたちの自信にはつながりませんし、保護者からの信頼も得られません。私は、本番テストの後にまちがい直しの時間をとるくらいなら、どの子も百点がとれるよう、本番テストぎりぎりまでみんなで高め合う時間をとるようにしています。それが「みんなで百点満点大作戦」なのです。

ここで大切なのは「みんなで」ということです。テストとは、自分の力だけで答案用紙と向き合う孤独で厳しい戦いです。しかし、テストの直前ぎりぎりまでは、「みんなで高め合う」豊かな時間にすべきなのです。

今回は、一年生の国語で「みんなで百点満点大作戦」に取り組みました百点が取りやすい算数ではなく、あえて国語にしたのは、算数ではすでに「教え合い」がしっかりと定着しているということ、そして国語の方が子どもたち同士の「豊かな交流」につながりやすいと考えたためです。

①「予習課題」で全員参加の授業を

今年は一年生の最初の物語文である「はなのみち」から「予習課題」に取り組んできました。次の授業の主発問に対する答えを宿題として書いてこさせるのです。これにより、全員が自分なりの答えを用意した状態で授業に臨むので、授業への「参加度」と「主体

性」が飛躍的に高まります。毎日の授業で「お客さん」状態の子が、テスト前だけがんばっても百点がとれるはずはありません。まずは授業に主体的に参加する。そのためには、今日の学習内容がわかっていること、そして自分なりの答えを用意してきていることが大切なのです。授業中に教師の発問に瞬時に反応して答えを発表できる子はほんのひとにぎりです。そのような子どもたちに依拠して授業を進めてしまえば、ほとんどの子は「お客さん」として疎外されてしまいます。しかし、瞬発力はないけれど、時間さえあれば深い思考ができる子はたくさんいるのです。そのような子どもたちも巻き込んだ深い学習をするためには予習課題は不可欠だと考えています。

②「ふりかえり」で子どもたちをつなぐ

授業の最後の「ふりかえり」には「わかったこと」だけでなく、①だれの ②どんな意見で ③なにがわかったか、ということを書かせるようにしています。そのためには発言内容だけでなく、「だれが言った意見か」ということも聞いていなければならないので、必然的に友だちの意見にしっかりと耳を傾けることができるようになります。また、ふりかえりを学級通信で紹介することで、「自分の意見が友だちをかしこくした」という貢献感を感じることができます。これが、「教室はみんなでかしこくなるところ」という「授業自治」の精神につながると考えています。

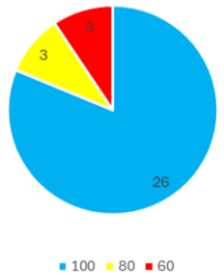
③「確認テスト」で逐語的読解を鍛える

一年生の国語テストは「逐語的読解」が基本なので、その力を鍛えるため、物語文でも、説明文でも、毎回授業の終わりに、その日の学習内容に関する逐語的読解の小テスト（確認テスト）を行いました。一問二十五点の四問（百点満点）で点数評価を行い、一覧表にすることで、逐語的読解の弱い子が見えてきました。また、全体的に点数が低かった日は、授業内容や問いを見直すことで、形成的評価としても活用することができました。また、毎日続けることで、はじめはほとんど書けなかった子が、少しずつ書けるようになっていく様子がみられ、続けることの大切さを実感しました。子どもたちにもすっかり定着し、毎回楽しみにしてくれています。

④テスト直前まで「百点満点大作戦」

最後の仕上げとして、テスト直前に「みんなで百点満点大作戦」に取り組みました。これは、四人班で、教科書を見ながら順番に口頭で予想問題を出し合い、答えるというものです。はじめに教師がお手本で何問か逐語的読解の問題を出し、イメージを持たせたうえで取り組ませました。上手に問題をつくれる子はまだまだ少ないですが、繰り返すことで上達していくと思われるので、続けていきたいと思います。何より「テスト直前までみんな百点満点目指してがんばった」という経験を積み重ねていくことが大切なので、これからも続けていきたいと思っています。

ちなみに実際のテスト結果は一問まちがいが三人、二問まちがいが三人で、全員満点にはなりませんでしたが、みんなでがんばった結果として、確認し合うことができました。



テスト満点大作戦～つけた力を確かめる～

大阪　根無　信行

一、テストは何のためにしているのか

はじめに、テストに対して、学校はなぜ単元ごとに行っているのかを、子どもたちには話すようにしています。

『テストは、成績をつけるためだけではなく、「あなたがつけた力がどれだけなのか」を確かめるためにしているのです。ですから、テストの前には、これまでの学習をふり返って、自分で「身についていないな」「忘れていたな」と思うところを見つけ出し、学習し直すことをお勧めします。テストには、今の学年でつけてほしい力だと考えられる問題が出されています。なので、得意な人だけでなく、みんながぜひ「満点」を目指してください。ただし、満点がとれなくても、落ち込んだりあきらめたりしないでください。テストは、間違ったところ、足りなかったところを見つける「ものさし」です。自分が「覚えていなかったなぁ」と言うことが見つかれば、あとはそこだけ集中して身につけ直せばいいのですから、するべき勉強の的がしぼられて、勉強する中身を決めやすくなります。例えば漢字も、「間違えてしまったところ」に絞って、学習をし直せばいいのです。』

二、テスト対策の授業を行う

小学校から中学校で、授業―試験（テスト）の流れの違いを感じたのが、いわゆる「テスト対策」でした。例えば、自身の子どもの通う中学校では、新出漢字の学習は、授業中にはありません。中間テストまでに、子どもが自分で漢字のワークを見開き五ページ進めておき、そこから出題されるものに解答する、という形です。社会でも、テスト範囲が「教科書○ページから◇ページ・ワークシート△号から☆号」という形で示され、それについて自分で対策を取るという流れです。

いずれこういう形になるであろう中学校のテスト勉強に向けて、テストに向けた学習のしかた（できれば自分に合った）を知っておくことが必要だと思います。

今年、四年生を担任しています。単元テストの前の、その教科の時間には、『テスト勉強』の時間を持つことにしています。算数では、教科書に単元の「たしかめよう」のページが載っているものが多いです。社会はとくに設けられていないので、ノートを中心にふりかえりながら、テスト範囲を確かめます。国語は漢字や言葉が中心です。子どもたちは黒板に書くことが好きなので、黒板に問題を書いて、子どもたちは紙に解答し、当たった子どもが解答を書きにきます。答え合わせをして、間違いやすい字は、みんなで一緒に確認することができます。読み取りのテストに対しては、「見出し」や「要約」といったその単元で出てきた国語の学習用語を確認しておきます。算数は、問題の「型」をテストに合わせた「うそテスト」を作って、学年で取り組んでもらっています。※

子どもたちが購入している市販のテスト問題と、出題の形を同じにして、数値や文章題で扱う物を変えています。（７つあるドラゴンボールの１つ分の重さを計算する、金塊を６ｔずつに分けるなど、あり得ない

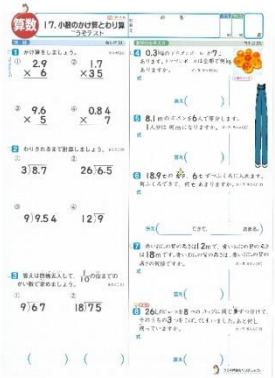
内容で、真面目にふざけて取り組みます）。授業中や宿題で、同じ種類の問題に取り組んでいたときにはつまずかなかった子が、問題の出され方が変わると解けなくなったり、誤答が多くなったりするため、単元をまとめてふり返ることが必要だと思っています。答え合わせを済ませた「うそテスト」は持ち帰り、「間違えた」問題だけ、もう一度してくることを、家での『テスト勉強』にしています。単元全体を見た後、苦手なところに絞って勉強し直す、ということがここでも必要なのだと思っています。社会のテストに向けては、支援学級在籍児童も同じ授業を受けているので、支援学級先生の手助けで、テスト時のみ、支援学級で受けることや、『上の図から選び、（　　）に番号を書きましょう。』というような問題には、「上の図」を目立つようあらかじめ蛍光ペンで囲って矢印をつけてもらったりすることで、テスト中にみんなと同じ状態で取り組めるようにしています。テストに向けて覚えたことが身についているか、事前に確認するため、まず、「〇〇【単元名】クイズ」として、時間をとってプレテストのような問題でふりかえります。出題はノートやワークシートに出ているものから出題しました。そして、答え合わせの後、教科書やノートのどこにそのことが書かれていたかを確かめました。答えが学習したことから出ているのを確かめることで“テスト前調べ”の大切さを伝えました。また、キーワードについて、言葉（文章）で解説する練習をします。（「公助」とはどういうものですか。「文化財」とは何ですか。という感じです。）自主学習ノートに、言葉の整理をする時間も作りました。社会や理科では、一問一答の問題づくりを子どもたち自身がして、それを友だちと出し合うことで、テスト勉強をするのも、効果があります。

三、おわりに

五年ほど前から、通知表の、項目、形式が「市内統一」され、すべて校務支援システムに「数値化」して入力することでしか成績は出せなくなりました。入力された数値を平均化して規定の三観点にＡＢＣの三評定がつくのですが、一つの単元テストで満点を取っても、また、いわゆる紙のテストで満点が多くても、システムの基準ではＡ評定がつくことはめったにありません。

通知表はほぼ全部Ｂで返ってくるのです。個人懇談で、おうちの人と通知表をもとに成績の話をしても、「全部Ｂで、どう受け取ったらいいのかよくわかりません」「算数ではどこが苦手だったからＢなのですか」としばしば尋ねられ、たしかに、この通知表ではほとんど何も「通知」されていない状態です。そこで、やはり「テスト」は「今の自分の力を測るものさし」と思いながら「満点」に近づくことでできたという気持ちを子どもたちにも、おうちの人にも分かりやすくつたえるため、懇談はテストをもとに話すようになりました。満点、に至らない子ももちろんいますが、履修主義に陥らず、テストをする→できたところを確かめる→後補充をする、という使い方が今後もできたらと思っています。

※←「うそテスト」



言語化する大切さ

丸小野　聡暢

知識を言語化させる取組

学力研「先生のための学校」の校長先生である久保齋氏が著書で次のように述べられています。『低学年のとき、とても活発で、生活や理科が大好きで、物知りだった子が、４年生くらいからさっぱり伸びないということがよくあります。それは、その子が“耳学問、見る学問”のまま止まってしまったからです。そのような子は好奇心が旺盛ですが、なまけ者で、知識獲得の手段をテレビなどの安直な映像文化に頼り、文章を通して獲得することを怠っていたのです。その結果、「読み言葉」「書き言葉」での学習へ移行できず、急速に成績が悪くなっていったのです。』私も授業をしながら同じようなことを感じたことがあります。授業をしていると、授業中によいつぶやきをしたり、よく発表をしたりする子どもがいます。その子たちは、授業の範囲を超えた知識をもち、周りの子どもたちの学習を深め、クラスの子から感心されることもよくあります。ただ、テストをしてみると意外と点数が取れないということがあります。このことは、久保先生が述べられている「読み言葉」や「書き言葉」に移行できないことと共通しているではないかと思います。私もそうですが、現在の子どもたちも文章を書くことが苦手な子が多いです。ならば、普段から書く機会を増やし、言語化させる取組をしていくことで解決されるのではないかと考えます。その一つが、今回の特集であるテスト勉強です。

教科書による学び直し

以前、４年生で何度か理科の授業をしたときに、疑問に思っていたことがあります。それは、実験で得た知識がテストの結果に結びつかないことです。『水と空気』の単元を行った時、実験に失敗した子がいました。注射器のような実験道具に水を入れて押す実験です。水は押し縮められないため体積は小さくなりません。実験道具は個人購入する教材でそれほど高価なものではありません。そのため、注射器を押したときに、力が強すぎて水が漏れてしまう子がいました。その実験結果に引っ張られて、水の体積は小さくなるという間違った知識が入ってしまったのです。授業では、クラスの多くの子の実験結果の傾向から、水の体積は小さくならないとまとめて間違いを訂正しました。しかし、テストでは水の体積は小さくなると答えていたのです。最初は、この子の勘違いかなと思っていたのですが、再び４年生を担任したときに、同じことが起きたのです。百聞は一見に如かずではないですが、自分自身が体験した間違った実験結果が知識として残ったのです。もし、この時にしっかりと言語化させていれば、テストの結果は違ってきたかもしれません。教科書で学び直すということは、丸暗記とは違います。思い込みや間違った概念を新しい知識につくりかえていくことです。単元の中で時間をかけて実験や観察をして授

業時間に間違いに気づいたはずなのに、テストをしてみると間違った概念に戻ってしまうのです。それほどに、子どもたちのものの見方をかえることは難しいのです。間違いを克服し、学力を定着させていくためには、正しい知識を言語化し、何度も脳に記憶させていく必要があります。ただ、教科書を丸写しでは、定着をしませんので、一つの知識を多面的に考察し、多様な知識と結び付けていくことをしなければいけません。そこで、単元の終わりにテスト勉強で言語化させ、何度も脳に記憶させています。テスト勉強はノートに行わせます。ノートのページを半分に折り、左側に問題をつくらせ、右側に答えを書いていきます。まずは、問題を自分で読んで答えを言って確かめます。次は頼りになるのはお隣さんです。ペアでお互いのノートを交換し、自分がつくった問題を読んでもらい、答えを確かめます。お互いに問題を出し合うのではなく、自分の問題を確かめてもらうことが大切です。このように、テストの直前までお互いに助け合いながら高め合っていくことで子どもたちの学力は伸びていきます。

テストの度に、テスト勉強を繰り返していくと、友達のテスト問題を見ながら自分の問題づくりの質が上がっていきます。ただ、高学年は、一問一答の問題づくりでは限界がきます。中学年までは、問いと答えがほぼ一致していますが、高学年では答えの中にそれなりの論理が必要です。論理を自分で展開しながら再学習することが求められます。テスト勉強では、ただ答えを書くだけではなく、絵や図を描いたり文章にまとめたりすることを求めます。学力の高い子は、テスト勉強の再学習でさらに学力を高めていきますが、学力の低い子や学習意欲の低い子は、この方法では形だけの学習になってしまいます。そのときに効果があるのは教科書の丸写しです。高学年になると文章も長くなり、教科書の丸写しは大変ですが、正しい文章を写すことで効果がはっきりと表れます。小学校では、あまりテスト勉強に力を入れて行うことはないと思います。そのため、最初は子どもも半信半疑で先生の言われたとおりにしているだけです。しかし、２～３回も行うとテストに結果として表れます。クラス全員で取り組んでいますので、クラス全体でテスト勉強におもしろみを感じてきます。以前、久保先生が「子どもは賢いから１００点を取るのではない。１００点を取るから賢くなるのだ」とよく仰っていました。まさに、その通りです。子どもたちは、できることに自信をもち、意欲が高まっていきます。そのためには、まずは努力が正比例するような取組がおすすめです。理科や社会科は単元ごとに学習をしやすいので何年生からでもこのテスト勉強はできます。高学年になると国語や算数で１００点を取ることはなかなか難しいですが、理科や社会科は案外１００点が取りやすい教科となります。テスト勉強の取組は、単に成績をよくするためだけではなく、中学生や高校生になった時の独り学習を行うための大切な取組となります。小学校を卒業するまでに勉強の仕方や楽しさを教えてあげることができれば、その子の一生の宝になります。テスト勉強にも様々な取組や目的があると思いますが、言語化することで学力の定着を行うことをおすすめします。言語化することは思考力や相手に伝える力も伸びていきます。

テスト満点大作戦　～一年生編～

加印いろえんぴつ　岸本　ひとみ

○1年生は、格差が大きい

低学年は、社会科と理科がなく生活科です。評価テストらしきことをするのは、国語と算数と音楽の楽典に関することぐらいしかありません。体育は実技中心ですし、保健の学習も3年生からです。

ところが、1年生は小学校生活の中で最も格差がある学年だと言われています。家庭環境の違う子どもたち(と保護者)が、学校文化に慣れ、学習用語を使えるようになり、親離れ子離れの第一歩を踏み出す学年ですから、格差を意識した実践は常に必要です。

また、月齢差の大きいのも、1年生の特徴です。4月生まれと3月生まれでは、11カ月の違いがありますから、理解力や語彙力、数感覚、運動能力等には大きな差があります。それに対応することも、大きな課題です。

○国語と算数で満点大作戦

何といっても入門期ですから、学習することが嫌いにならないでほしいという願いが前提になっています。ちょっとずつ頑張れば、満点が取れるという感覚を身につけることができれば、これからの長い学校生活がかなり豊かになると考えて、満点大作戦を展開しています。

◆国語編

語彙を豊かにすれば、どの子も満点になるのが低学年の国語です。でも、それを学校生活だけで保障できるかというと、なかなか難しい。

そこで、漢字とカタカナの満点大作戦を展開しています。ミニテストを繰り返して、覚えていくことは他の学年と同じです。それが、漢字だけではなく、カタカナでもあるというだけのことです。

私のクラスの漢字ミニテストはとってもシンプルです。

市販の漢字ドリルを使っていますので、

かんじ　ミニテスト　／（　　）

名まえ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦

1年生だと7問ずつです。問題は漢字ドリルにあります。これを、何回も繰り返してテストするだけです。評価テストも市販の

ものを使っているので、その問題に出ている漢字で間違いやすいものを中心に、ミニテストを繰り返します。

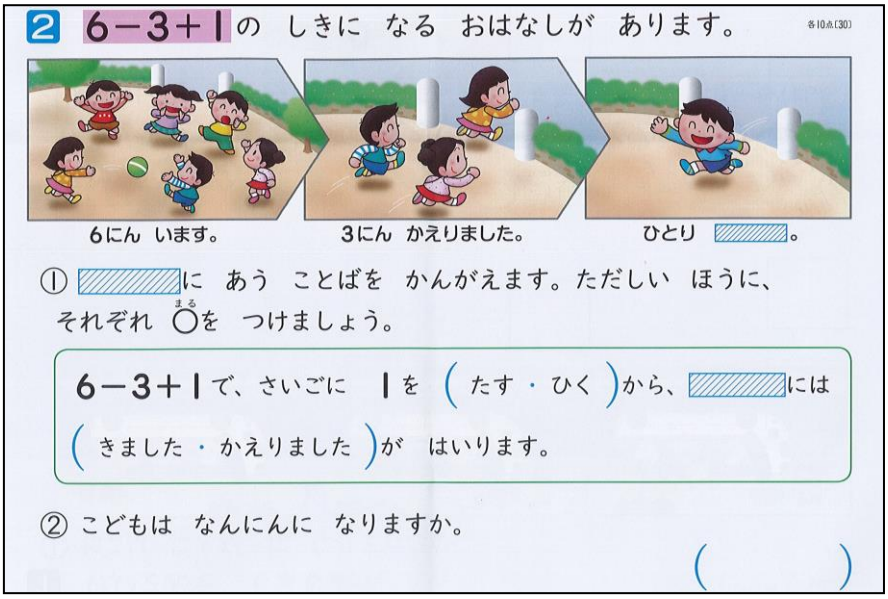
合格すれば、シールを貼ることにしていますが、何度合格してもＯＫにしているので、ズラリと並べる猛者も出てきます。

◆算数編

１年生の場合、国語よりも算数の方が満点大作戦が必要です。下の問題が、今年度の**『迷題』**ＮＯ．１ではないかと思いました。まだ、挿絵を手がかりに考える時期の子どもたちですから、答えを（１人　ひとり）としてしまうのは、無理からぬことです。

この問題、絵がなかったら４人とちゃんと答えられるのに、絵が思考のじゃまをしているという例です。□の中は、（きました　・　かえりました　）で、ちゃんと「きました」と答えていても、最後の答えのみ(ひとり)とする子どもが多いだろうと予想しました。

これを見て、事前に同じパターンの問題を練習させました。数字や加減は変えましたが、式をもとに考えることがポイントになることを教えた後にテストをすると、計算ができる子どもは、ちゃんと４人を導き出してきました。



2　**6－3＋1**の　しきに　なる　おはなしが　あります。　各10点(30)

6にん　います。　3にん　かえりました。　ひとり　□。

①　□に　あう　ことばを　かんがえます。ただしい　ほうに、それぞれ　○を　つけましょう。

6－3＋1で、さいごに　**1**を　（たす・ひく）から、□には（きました・かえりました）が　はいります。

②　こどもは　なんにんに　なりますか。

（　　）

この会社のテストは、この問題で数学的思考を測るというのですから、それにも驚きました。よくよく調べてみると、他の学年でも同様の問題が多くて、算数嫌いの一因になりかねません。新年度の選定の基準について、職員会議で話し合う必要がありそうです。

満点大作戦の思想にはほど遠いかもしれませんが、低学年だからこそ、「読み、書き、計算」のシンプルな学習活動の中で、努力が成果に結びつくという経験を、できるだけたくさんさせてやりたいと考えています。それには、保護者の協力と支援が不可欠なのも低学年です。せめて、テストで満点を取ってきたわが子を、ギュッとハグしてくれる家庭ばかりであってほしいと思い、**「満点大作戦＋ハグ」**セットにしています。

満点の日の連絡帳には、

㋛こくごテスト百てん　ハグ１０びょう

と朱で書いて、持ち帰らせています。

テストはチーム戦

加藤　英介

テストって？

　テストは好きですか。と聞くと満点を好きと嫌いではっきり分かれる。それは、満点かどうかが基準であった。言い換えると、自分の満足のいく点数を取れるのならば好きになるということでもある。テスト嫌いな子に対して、今までどのようにテストに向けて勉強していたのかと聞くと「何もしていない」「そもそもやり方がわからない」という答えがほとんどでした。学校では、テストに向けて、漢字練習や計算練習、テスト勉強の基礎となる取組はしているものの、それは教師の感覚である子どもには伝わっていないということがわかった。そこで、テストの目的を一緒に考え、テストに向けての取り組み方、少しでもやりたくなる工夫取り入れる中で点数も上げていきたいと考えた。

テストの目的は？

　そもそも「テストをするための目的は？」と聞くと「自分がわかっているかどうかを知るため、成績をつけるため」などの意見が出された。その後、次のような話をしました。

　「テストで、できることなら何点を取りたいですか。あえて、０点を取りたい人はいないでしょう。しかし、満点を取りたいと思ってもなかなか取れないと思う人もいるかもしれません。しかし、みんなは満点を取れるだけの能力があります。知らず知らずのうちに、満点を取る実力は身についているのです。だって、授業を受けているでしょ。漢字テストで例えるなら、毎日、新出漢字に取り組んだり、宿題でノートに書いたり、マスターで先生にミニミニテストを受けたりして確実に取れる力は備わっていると思います。どうして、そうするかと言えば、満点を取ってほしいと先生もみんなと同じで思っているからです。自己ベストを更新してほしい、できる自分に出会ってほしいと思っているからです。テストは自信をつけるためのものです。今日からたくさんの自信をつけていきましょう。」

テストまでの道のり－漢字編－

　全教科の中で、取り組みやすいのは漢字や計算である。それは、難しいことは抜きにして、単純であり、少しの粘り強さや教師のサポートがあれば満点をとることができるからである。

　テストまでに行うことは

・新出漢字
・漢字マスター
・うそテスト
・チームで特訓
・小テスト

という流れで自信をつけさせる。毎日、国語の授業、スタート十分程度は新出漢字を行ったり漢字クイズをしたりして、漢字に対しての苦手意識をなくす。また、

クイズといっても誰でも答えやすいように「つづくという漢字は次のうちどれかな」と最初は選択クイズにし、慣れてきたら、指書きクイズ、そして、熟語クイズへと段階を追って慣れさせる。漢字への興味がわいてきたところで、次の段階へと進む。

漢字マスターとは、新出漢字を覚えているかどうかのテストである。子どもがドリルをもって、先生のところにテストを受けに来る。「つづくという字を指書きしなさい」と伝え、書き順が合っていれば合格である。合格した子は名簿に○をつけ次へと進むことができる。子どもたちの中にはテストを受けに来ることに対して不安な子もいる。そういう子には、個別に「一緒にやってみる？」と声をかけたり「練習してみようか」と取り組んだりすることで気持ちを上向きにする。ある程度できたら、授業終わりの五分程度でノートにプチテストをし、定着を図っていく。

テストの前日には、うそテストを行う。これは本番と同様のテスト内容を配布し、どの程度自分ができているかどうかを確かめるものである。また、苦手な漢字や間違えやすい漢字を把握する時間でもある。その際に、自分の目標点数も決めておくとよい。その後、自分の点数を上げるため、仲間の点数を引き上げるための取り組みである「チームで特訓」をする。こういうときには、学年目標やクラス目標を活用し「みんなが決めてくれた目標を達成するための道は２つあります。Ａ、自分だけがよければいい。Ｂみんなのためにベストをつくす。どちらを選びたいですか」と指針を示す。また「自分がもっている力は自分のためだけに使うのはもったいないことです。自分の力を人のために使ったとき、もし、点数が伸びたとしたらそれはすごいことです。それが、○組でできたとしたら、みんながうれしくなります。そんな教室はすてきです。さぁ、あなたの力を誰のために使いますか」と問いかけて特訓をスタートさせます。そして、特訓後に、再度テストを行い、自分の頑張りを自己評価します。

ここまでを経て、ようやく小テストにたどり着きます。結果は過程で決まります。多くの子がいつものテストよりも確実に上がります。「努力は嘘をつかない」この言葉を伝えつつ、どんな目的だったのか、どのような取り組みをしたのか、自分に合う方法は何だったのか、友達と取り組むことのよさはあったのかなど、振り返りを充分に行い次に備えます。今までの取り組みと比べて何を変えたらよくなるのかというのをテストのたびに、振り返らせることにより、自分だけの学び方を手に入れることができてきます。

おわりに

今回は、漢字を中心にお伝えしましたが、目の前のクラス・実態に応じた取り組み方を進めることで、その子自身を伸ばすことができ、クラスや学年も成長へと導くことができます。日々の業務に追われる中で、やっつけ仕事になってしまいがちですが、テストこそ大事にするべきではないかと考えています。

「どの子も伸ばす」を本気で考える連載　73

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長　岡本　美穂

「海のいのち」（東京書籍）

1　単元の計画（全11時間）

1　全文を通読し、初発の感想を書く。

2　初発の感想を交流する。単元の学習の見通しを立て、「つけたい力」を確かめる。

3　物語のあらすじをとらえる。場面ごとに題名をつける。

4　太一と父の関係に注目して、一・二場面の太一について考える。太一の父の生き方を考えよう。

5　太一と与吉じいさの関係に注目して、三・四場面の太一について考える。与吉じいさの生き方を読み取ろう。

6　太一と母の関係に注目して五場面の太一について考える。母の悲しみを知りながら海にもぐる太一の気持ちを読み取る。

7　六・七場面の太一の変化について考える。また、なぜ変化したのかについて考える。

8　これまでの場面とつなげて、八場面の太一について考える。村一番の漁師と一人前の漁師のちがいについて考える。

9　太一の生き方について考えたことをまとめ、伝え合う。

10　自分の選んだ場面を朗読し、その様子をタブレットで録画して提出する。

11　物語を読んで最も強く心に残ったこと、その物語が自分に強く語りかけてきたことを学習のまとめとしてポスターにまとめる。題名である「海のいのち」という言葉に着目して、作者の伝えたいことをまとめ、自分の考えも書く。

2　板書の基本

初発の感想として子どもたちに、「このお話は～な物語」と書くように伝えると、

・このお話は、太一のクエ（おとう）に対する気持ちの変化がよみとれるという物語です。

・このお話は、いろいろな人→おとうさん・与吉じいさから、魚は大切だ、ということを学んでいたという物語です。

・このお話は、太一が大魚を、海のいのちと感じるという物語です。

・このお話は、太一が村一番の漁師になるけれども、魚など海のいのちを大切にするという物語です。

・このお話は、主人公の太一がまぼろしのクエに出会って成長するという物語です。

というように、太一を通して「海のいのち」を読んでいる子どもたちが多いことがわかります。小学校生活のまとめの時期を迎える子どもたちにとって、将来について考える機会も少しずつ増えてきて、人間の成長や生き方について考えることに適した作品だと考えています。

「海のいのち」は、中心人物である太一が、父や与吉じいさなどの人物との関わりを通して成長していく作品です。文章中で

は、細やかな行動描写、巧みな比喩や色彩表現、臨場感を生み出す文末表現などがあり、これらの優れた表現によって子どもたちは物語の世界観を豊かに想像し、味わうことができます。

また登場人物も

父：太一にとっての憧れであり、背中を追う存在。

与吉じいさ：確かな技術と漁師としての「生き方」を教える存在

母：太一を心配しながら、見守る存在

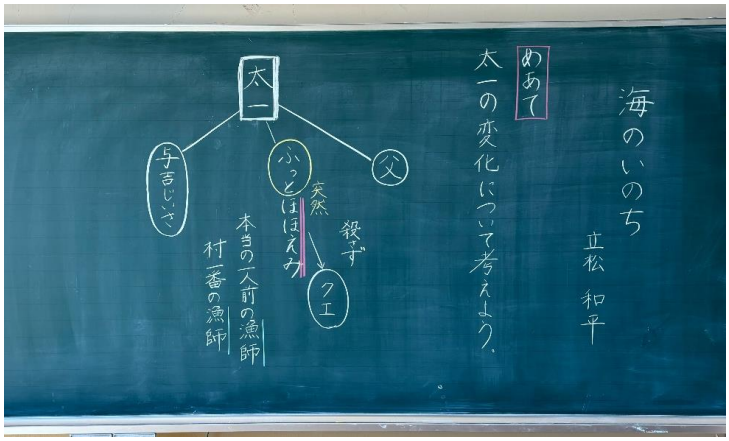
クエ：太一が追い求めるもの。「海のいのち」

というように、太一を通して見ていくことで、より考えも深まります。そこで、太一を中心にした板書にすることで、太一がどう変化していくのかが視覚的にも伝わるような板書にしていくことを意識しています。特に太一の変化を考える場面をテーマにした授業では、一人ひとりの意見を大切にし、それぞれの考えと板書のかかわりがよくわかる板書の工夫を紹介します。

板書のコツ

8時間目

めあては、「太一の変化について考えよう」です。前回、六・七場面の太一の変化について指導をしました。先ず、これまでの場面とつなげて、八場面の太一について考えます。次に、前回の学習を振り返りながら、「めあて」を確認していきます。



七場面は太一が瀬の主（クエ）と対峙する山場の場面だと言えるでしょう。物語が太一の視点で描かれているからこそ、この場面では中心人物、太一の心情のゆれ動きがこと細かに描写されています。

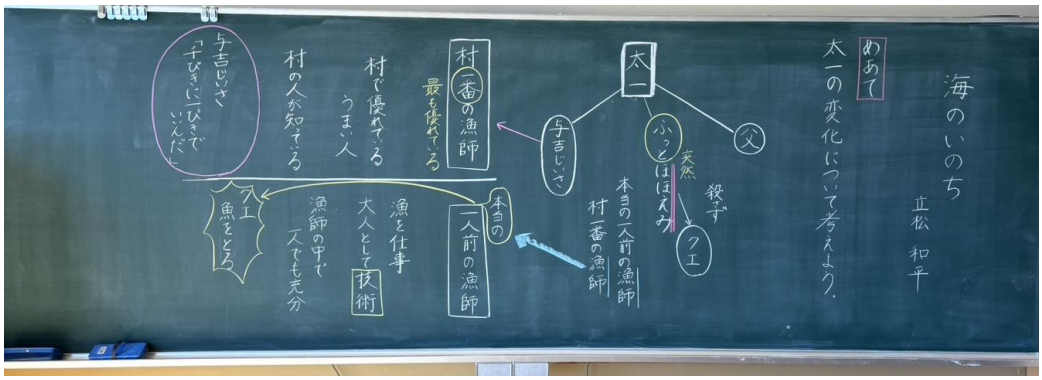
この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないと泣きそうになりながらも、太一は水の中でふっとほほみクエに向かってもう一度えがおを作ります。太一は

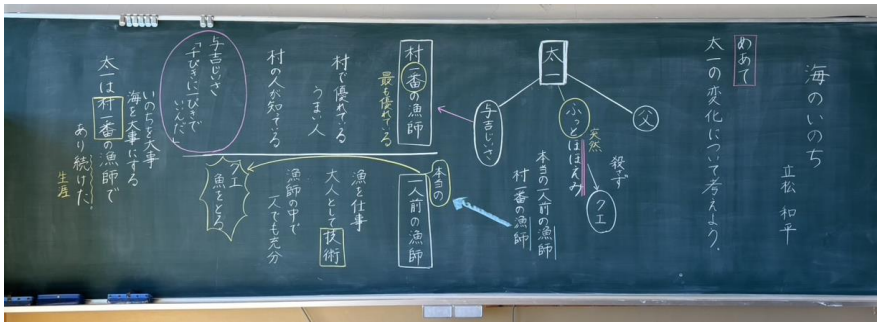
どう思ったのかは、はっきりとは叙述していません。だからこそ、思考を巡らせることができるのです。子どもたちの実態に応じて使い分けたいものです。この部分が「大きく変化」した部分だと気がついた子どもたちは、村一番の漁師と一人前の漁師のちがいは何かについて考えるようになりました。

比較がうまれる板書

ここでは、太一は瀬の主（クエ）を目の前にして「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれない」と考えます。結末では「村一番の漁師であり続けた」とあります。この２つは同じなのか？という視点で子どもたちは考えていたので、板書では、視覚的にも比較ができるようしました。

子どもたちの考えと考えの比較もあれば、言葉と思考の比較、思考と思考の比較など様々です。事実と考えを区別するためにもチョークの色や、囲むなどの技法を使って区別していくことも大切です。





最後に「太一は一人前の漁師になれたのか」という疑問を持った子が発言しました。振り返りでは、「瀬の主＝父＝海の命」と太一がとらえ、そこに〈海に生きる、海とともに生きる〉という価値を見いだし、「海といっしょに生きられる漁師」や「海に生きる、海とともに生きる」と考える子どもたちがいました。

考える力をつけるための授業の組み立て方⑮

班で相談せざるを得ない問題を出す

大阪教育サークルはやし　荒井　賢一

五年理科「台風と天気の変化」の第三時で「台風に向けての備え」として、四つの問題を出した。それらの問題の答えを班で相談して、交代で一人ずつ答えを板書し、答え合わせをしていく。

［1］台風の災害情報を手に入れる方法

①手まきじゅうでんラジオできく
②人に聞く（消防の人など）。
③スマホでニュース（情報）を見る。
④他人にきく
⑤ニュースでみる。
⑥インターネットで調べる。
⑦ラジオを聞く
⑧ニュースを聞く
⑨インターネットで気しょうちょう公式サイトを見る

次に読み進める前に、読者のあなたに考えてほしい。どれが〇でどれが×か、を。

①④⑤⑥⑦⑧、解答不十分で△をつけた。「ラジオで聞く」とあってもラジオで音楽を聴いても意味がない。また「ニュースをみる」も、何の媒体を使ってみるかが書けてないと不十分なのである。

第一問目に、十分で正解できたのは②③⑨の三班だけだった。

黒板には班の席で一番の子が書きに来ているが、班の相談を経ているので、これは班の解答が不十分ということになる。一問目で〇がつかないと、二問目以降、子どもたちは答え方に注意を払うようになってくる。（教師の狙い通りともいえる。）

ちなみに一班が「充電ラジオ」を書いたのは、授業最初の20の扉で、手巻き充電ラジオを当てさせてからだろう。

［2］台風が近づいてきたときにしてはいけないこと

①建物の中から外に出ない。
②川・海の近くへ行かない
③海の近くに行く。
④うみ、いけ、かわなどにちかづく
⑤無敵と言って台風の目めざして走らない
⑥台風の方向に行き、たこあげをする。
⑦自分から台風に近づく。
⑧台風に、自分からとびこむ。
⑨川であそぶ。

「してはいけないこと」と言われたら、「〜しない」という表現は×になる。

それゆえ、①②⑤班が×となる。「建物の中から外にでない」をしてはいけないなら、「建物の中にいる」ことがしてはいけないことになってしまうからである。

［3］台風に向けての日ごろのそなえ

①食りょうの消費期限をかくにんする
②ひなん場所や、集合場所、あぶない場所のかくにん
③くんれんしておく（消防の人など）
④ひなん場所をきめておく
⑤がんじょうな建物が、どこにあるか知っておく

⑥ハザードマップをみる
⑦食べ物と水を用意する
⑧ひなん経路を覚えておく
⑨かわらをしっくで動かないように固定する

「台風に向けての日ごろのそなえ」と同時に「台風が近づいてきたときのそなえ」の問いも出しておきました。2つ並べた方がその違いが分かるからである。

［4］台風が近づいてきたときのそなえ

①ぼうさいバックをだしていつきてもいいようにじゅんびする
②げんかんに防災バックを用意する。
③閉じまりをしっかりする。
④手まきじゅう電ライト、スマホなどをもって行く。
⑤きけんな物を安全な場所においておく
⑥食料をちょうたつする。
⑦ひなん場所をきめておく。
⑧非常食を用意する。
⑨まどにガムテープではる

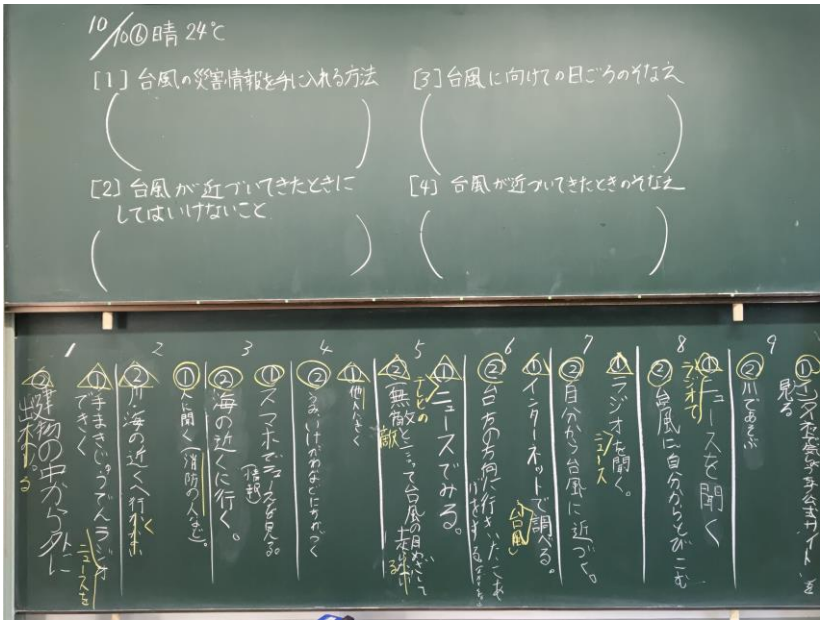
③は「閉じまり」は「戸じまり」、これは後で気付いた。

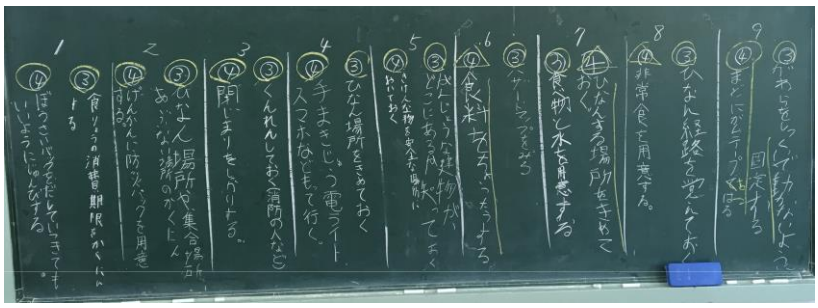
⑥と⑧は、台風が近づいてきたときにすると、近くのスーパーやコンビニから、食料品（保存食）が一気になくなってしまうことが起こったりする。

⑦の「ひなん場所を決めておく」のは、普段からしておくことである。

日本は台風だけでなく、地震もよく起こる国である。災害に対する日ごろからの備えは必要だけれど、いつもピリピリしていては、日常生活を楽しめない。

それゆえ、日ごろの備えと喫緊の備えを分けておく必要がある。





社会科（歴史）授業力アップ講座　二十二

指導法研究④

学力研常任委員　深沢　英雄

一、資料の読み方の基礎・基本

最近の社会科の六年生（歴史）の教科書は、とてもカラフルで資料です。昔の教科書と比べるとカラーであるだけでなく、資料の数と教科書に占める、資料の大きさがずいぶん変わってきています。折込みの資料があり、広げると3ページ分になるものもあります。

歴史の場合、絵画資料、現存している遺跡・遺物・建物の写真、解説のためのイラスト、地図を使った解説資料、グラフなど多岐にわたります。その中で、重要なものが、絵画資料です。イラストの想像図も含みます。

有田和正氏は、『社会科は多くの資料を使う。従って、資料を読み取る技能を鍛えないと、授業はいつまでたっても初歩的な段階で止まってしまう。グラフなどは多少読めても、絵図の読み取りはできない。そこで、「絵」を読み取る基礎的な技能を鍛えないといけない。絵をすみずみまでよく見えるようにさせるには、絵をコピーして着色作業させる。すると着色を楽しみながら自然のうちによく見る。「どの季節にも見えるように着色」して提示してもよいが、線書きだけの絵を提示してもよい。「この時代は、何時代のことでしょう?」と問う。江戸時代であることはすぐわかる。6年生の子どもにとって、最も知識の多い時代が江戸時代であるからだ。「大名行列」ということもわかる。「では、この大名行列は、春夏秋冬のいつでしょう?」と季節を問う。「えっ?季節がわかるの?」・・・こういう指導（絵の見方）と一回すると、絵や写真の見方が変わってくる。絵の内容を読み取るには、基礎的な知識が必要であること、わかったところから順序に読んでいくこと。これで歴史的な資料を見ることが面白いと思うようになる。視界が開けるのである。見方がまったくわからなかったのが、少しわかっただけで視界が開け、そこから新しい世界が見えてくるのである。』

私は、この文を読んで、このような読み方を鍛えれば、絵画資料を読むことが楽しくなると感じました。

二、資料を大きくして見せる

教材研究で読みといたものをどう見せて、資料から子どもたちにどう考えさせたらいいかを考えていました。

有田先生の実践はとてもワクワクするような実践で真似したくなるものです。長篠（設楽ケ原）の戦いの実践が本にのっていて、追実践をしようと思いました。その本がでた時は、同じようにしました。何年かたって、六年生を受け持ち、長篠の戦いを教える時には、有田実践だけでなく、他の実践や専門家が書いた書物、そして長篠の戦いのあった場所にも行って教材研究をしました。

有田先生の「調べる力・考える力を鍛えるワーク」明治図書　二００二年九月発行には、「Ｑ３８　武田軍は、どうして鉄砲をつかわなかったのでしょう。という問いがあり、Ａ、信長より早く鉄砲の有利性に気づき、多数の鉄砲を購入していました。しかし、武田は地理的に恵まれず、家来たちは城下に集めて鉄砲の射撃訓練などできなかったのです。山国ですから、家来は分散して住んでいたからです。」とありました。専門家の本を読むと、父の武田信玄の時代から鉄砲をいち早く手にいれていたと書かれていました。平山優氏は、「長篠合戦で、武田軍は、織田軍鉄炮衆に銃数だけでなく、豊富に用意された玉薬に圧倒され、まったく途切れることのない弾幕にさらされ、敗退したのだろう。逆に、武田軍鉄炮衆は、早い段階で、弾切れとなり、沈黙を余儀なくされたとみられる。」と書かれています。織田の鉄砲対武田の騎馬隊「旧戦法」対「新戦法」の激突で武田は負けたと言われるが、豊富な物流と物資を誇る西国、畿内を背景にした織田と、それに乏しい東国の武田の戦いだったと歴史研究が進展してきています。

じゃあ、長篠合戦図屏風の中に武田の鉄砲は描かかれているのが、気になりました。そこで、合戦図屏風を掲載している本を探し、拡大コピーにかけて大きくしました。屏風に書かれている、人、馬、鉄砲を数えてみました。

	織田・徳川軍	武田軍
人数	２０１人	１２５人
鉄砲	３３挺	４挺
馬	３８頭	２３頭

織田・徳川連合軍は鉄砲約三千挺と言われます。平山氏によれば、武田軍も千から千五百挺は保持していて、本番ではさらに増えていたとも言われます。差は、玉切れだったという説です。拡大してみると武田側に三挺の火縄銃をもった兵が描かれていました。屏風絵を拡大して、班ごとに配り、子どもたちに見つける指示を出しました。そうすると子どもたちは、素早く見つけました。ある学校の六年生で授業をした時、授業中で三挺見つけました。後日、そのクラスの担任から「ある子が、家に帰っても屏風を見つめて、もう一挺あることを見つけました。」と連絡がきました。もう一度見ると、少しわかりにくいですが、確かに火縄銃です。子どもってすごいなと思いました。三挺ではなく四挺だったのです。確かめるため、長篠合戦図屏風の研究本を読みこんでみると研究者の記述に四挺描かれているという文を見つけました。

その後の授業では、資料を拡大し、班に一枚配って、そこから発見させて、授業を構築していく流れをとることをしています。縄文時代、古墳、元との戦い、参勤交代、出島など活用範囲は多くあります。資料を拡大して見させる。お薦めです。

「先生のための学校」誌上　開校

学力研　先生のための学校　校長　久保　齋　２０２４　１１

百点満点大作戦
高学年では親と子をまきこんだ運動を

この時期は、独り学習の習慣をつけさせる大切な時期です。教師の指導と親の子どもを見守る温かい目、やさしい励ましと、本人のやる気をマッチしたとき、子どもはすごい力で勉強に取り組みはじめます。また、落ちこぼれが顕著になる時期でもありますが、低学年との違い、自覚できているので、システムさえ整えば、急速に改善する時期です。

高学年の子は、手だてと評価の基準を示してやれば、ずいぶんとがんばるものです。当時やった社会科教科書丸写しの結果、クラス平均が九・九あがりました。三三・六もあがった子もいました。私が興味をもったのは、読解力の高いグループの平均が一・二伸びて八六・〇にとどまったのに、低いグループの平均点が一六・六も伸びて八四・二と高いグループに近づいたことでした。

丸写しは単に写すことではなく、黙読で内言化し、考え、書くという頭の働きが必要であり、読解力の乏しい子も、写している間に、自然と力がつくということなのです。

高学年の家庭学習習慣確立は、教師主導で行うのがよいと思います。しかし、ただプリントを作って宿題をやらせるだけでは、高学年はのってきません。目標をつくり、手だてを示し、親と子をまきこんだ運動にしていくことが大切です。

例えば、“理科と社会科は百点をとろう”という目標をつくり、テストの日を一週間前に示し、教科書丸写しという方法で、みんなで取り組みます。そして、結果を報告するのです。こうすることにより、子どもたちは一週間という少し遠い見通しをもって、独り学習に取り組んでいきます。

次の作文は、“社会科丸写し満点運動”をやっていたときの子どもの作文です。

社会科テスト

武田　龍之助

テストの日、朝からテストの事ばかり考えていた。そして、学校へ行っても、テストの事ばかり考えていた。テストをくばらはる前、簡単だったらいいのにと思っていた。くばらはって、いっせいにはじめた。やってたらわりかし簡単だったので「やった！百点とれるかもしれん」と言ってしもうた。やってたらだいぶ時間があったから、十回ほどみなおした。ちょうど、最後の問題は、下の本のＰ１５の上の図にのってたやつだった。そこも目をとおしておいてよかったと思った。先生が採点しやはる時ぼくは「百点とれますように」と何度もいのった。そして、ぼくの採点しやは

った。ぼくは四人目の百点だった。
その日だけは帰るのが楽しみだった。そして、「青空」をもらった。百点が十四人と書いてあった。そして、ぼくは「その中にぼくも入ってんにゃな」と思った。家に帰って、友だちの家に学芸会の劇の練習に行って帰って漢字を覚えて夕方になった。ぼくはテストと「青空」を見した。お母さんは「よかったなあ」といってくれはった。その日のお母さんはきげんがよかった。丸写ししてよかったと思った。

社会科テスト

豊島　博子

私は「社会の教科書を丸写ししなさい」と言われた時、ああどうしよう。わすれたらテストは０点やし、どうしようとばっかり思いました。家に帰ってずーっとして、そろばんに行って、ばんごはんもすぐ食べてまたしていたら、お母さんが「そんな長いことしてて、見てたらかわいそうやわ」と言ってはった時、私はむかっときました。「いくらなんでも、勉強ぎらいといってたって、私がする時はちゃんとするのにな」と思いました。
夜ねる時も、お父さんが「やっと、ちゃんと勉強する時がきたな。今までずーと遊んでたからな」とわらいながら言わはりました。私はその時はなんだか、「先がおもいやられるな。これからどうなるのかな」と寝ていても思っていて、ちょっとおちつきがなかったと思います。
自分でも、こんなにがんばったのははじめてです。宿題がおわった夜なんて最高でした。わくわくしてまたねられませんでした。
テストの結果はもう少しの所で百点とれなかったけど、がんばったからいいと思います。今度はがんばりたいと思います。

この二人がこんなにがんばれたのは、クラスあげての学習運動を組織したからです。その当時の学級通信は、すべて学習に関することでうめられていました。
二年間の主な取り組みは
○計算大会（四則、分数、少数）
○文章題作問大会（班で問題作りを競う）
○読書運動（いつでも・どこでも読書、テストができた子・作業ができた子はすぐ読書）
○漢字大会（卒業までに、六年間の漢字全部マスターする）
などでした。

今はこれに理科・社会の問題作りを加えています。教科書を読み、教科書にそって自分でノートに問題を作りっていくのです。これができられ大人の学習方法が完成したということになります。とんちんかんな問題作りもありますが、宿題でやってきた問題を班で交流していくと、ずいぶん上手になってきます。
いずれにしろ、高学年には学力づくりで、正面からぶつかっていくのがよいのです。ソビエトの教育実践家であったMakarenko のいう「最大の要求、最大の尊敬」という言葉の意味がわかりあえたとき、教師も子どもも、うんと伸びることができるようになると思います。

先生のための学校

加藤　英介

はじめに

「一人でもやり続けることが大切」

久保校長と力強い語りから始まった。

講座Ａ　できる　わかる　つなぐ

塩田真奈美先生からは「みんなでつながる音読」について実践紹介があった。1年生の担任である先生は、1学期は学習・体力をつけるために遊びを通して、学ぶ力を身に付けた。合同学習などを通して、みんなで取り組むことの大切さを毎日意識して取り組まれていた。

2学期になり、子どもたちの中で、学校というもののよさが少しずつではあるがわかってきたというクラス実態である。

音読で大事にすべきことは、学習に向かう気持ち、読めるという自信、みんなといっしょにやるからこそ力となるという三本柱である。これらはすぐに習得できるわけではない。なぜなら、音声言語で覚えている子もいれば、絵だけで読みとっている子もいるからである。そもそも、読むことに対して嫌気がさしている子もいるのが現状である。そのため、テストも自分の力で解くことが難しい。それらを踏まえて

・ひらがな練習・視写

・ことばあつめ

・音読

という当たり前かもしれないが、丁寧に何度も繰り返して、積み上げてきた。また、読み先行（ひらがな、カタカナ、新出漢字）と体力づくり（挨拶、日直のスピーチ）で一人ひとりが安心できる環境を整えた。発言するときには、話す子だけでなく、周りの子が聞く・待つことのよさも伝えた。音読では、句読点で息を吸う、おなかから声を出す、読む場所を目で追う、教科書の持ち方と一つずつ確認しながら取り組んでいた。

どの学年でも、5分の習慣を当たり前にすることで、授業モードに気持ちを切り替えることができる。音読に取り組むことで、言葉を習熟させることができる。読んだことを書くことにつなげることもできる。音読をタブレットで録音して、比較したり、互いに見あったりして切磋琢磨する様子も見られるようになった。

塩田先生のいつも意識していることは

・最後まであきらめずに読もう

・みんなと共にがんばれた自分をみつける

・友達のがんばりをみつける

・昨日よりも良かったことをみつける

である。その結果、今では、詩を読み終えたら、もっと読みたいと意欲的に読み進める子や言葉に興味をもち調べる子、詩をつくってみたいと主体的に取り組む集団へと成長してきた。

講座Ｂ　教材解釈　授業実践

荒井賢一先生からは「全員参加をめざす理科授業の組み立て方」についてお話があった。理科専科では、実験単元は時間数通り進めることができるが、それ以外の単元については時間をもてあましてしまうことがある。今回は「月の形と太陽」の学習を例に模擬授業をする。

一時間目

まず、ノートに次のことを書かせる。

・日付
・時間数
・気温
・単元名

を書かせる。これは、理科だからこそ、気温は肌感覚で理解させたいという願いが込められている。

そして、月について知っていることを番号とともに書かせていく。（いきなり書かせず、いくつか例を出して確認する）その間に教師は、全単元のテストを配り、間違え直しなどをさせ、時間を効率よく活用する。五年生なら5個でＡ、十個でＡＡと評価も明確にする。ある程度の時間になったら「知っていることがもう書けないという子、今書いているところまでにして、前にもって来なさい」と全員参加の仕組みをつくる。そして、教師は番号を指定しながら、意図的に黒板に書かせる。（書ききれない場合は背面黒板も使用する）

子どもの出た意見については、番号順に自分の考えを発表させる。意見の中で、質問がある場合は「何番の〇〇さんに質問で、〇〇ってどういうことですか」と互いに聞かせる。もしくは、周りで分かりそうな人に発表させ、つなげる。教師は補足説明や、意見の分類整理をしながら、全体で共有することで、理科用語を教えていく。

・地球が回ることを？
・月はぼこぼこ？
・太陽はひかっている？
・中秋の名月とは？

と、テンポよく進める。

二時間目

星座早見番の使い方を教え、実際に使う。形が変わること、位置が変わることを教ええ、体感させる。三時間目以降も同様に「月の見え方」について学習する。その後、テスト問題を作成させる。

全員参加を意図的組み込むことで、みんなが安心して、活躍することができ、集団としてもよりよくなる。これを実現するためには、毎回違うパターンの授業ではなく同じ型の授業にすることが大切である。

講座Ｃ　学級づくり・授業づくり

久保斎校長からは「基本的なこととして実践報告にほっとしている。それは、教育現場が見ることができないからだ。タブレットがクローズアップされている今だが、本質的には昔と変わっていない。タブレットがあるからといって、学力が必ず上がるわけではないからである。個別最適な学びとよく言われているが、デジタルでやることよりも、アナログで継続的に指導することは教師にしかできない。システムとして、つくりあげていても、それを抽出して、その子にあっているかどうかはさだかではないからである。

何もやってこない子、×が付いている子できている子など、全部ほめることができるのに、デジタルにより、色合いがなくなっている。つまり、怒ることばかりが増えている現状がある

子どもたちの話し合いがチャットで行われる姿を見るが。そんなことしなくても話した方が早いのではないか。タブレットが効率よいように見えるが効率はわるいのではないか。そんなことを思う。」と述べられていた。

コモンとしての共有・学級づくり

クラスはみんなの共有物、学力をつけるだけでなく、宝物なんだという心を育て、力をつけ、財産に変えていくのである。そうするためには、協力・連携が必要である。職場の同僚、子どもたち、保護者も巻き込んで、子どものために力を借りる。懇談会では「おかあさんも力も貸してくれなければ無理ですよ。みんなの財産なんです。あなたをまもるために、メモをしておいてください。一組と二組は違って当たり前。子どもが違えば、やり方も違う。同じであれば気持ち悪い。おしつけがましい。個性がちがうんだから。」と言い切る。相談しあって、色をだしている。だから、違わなければいけない。ということをどれぐらい保護者に伝えているかがキーポイントである。

学力づくりでの取り組み。

教育とは本来不十分なものである。見渡してみれば、問題が必ずある。問題行動にはどう対応するか。それは子どもに聞き、一緒に考えることである。

「そうだね、なんかいい方法ない？できる方法ないかな」と教師はコーディネートするのだ。子どもの力を借りた方が、がうまくいくケースが多い。先生は動くのは仕事ではなく、コーディネートすることで周りを育てるのが仕事である。

おかしい！

ある小学校をつくるときに、子どもたちに必要だからと住民が寄付をしてつくった。その学校は今、ホテルとなり、いつの間にか金儲けの場所となっている。空地や草地もフットサルなどに変わる。一個人、一企業のものになっているのである。その理由は「民営化は利潤がないから」である。学校にも入ってきた。タブレットアプリでは「楽だから」という安易な考えで導入されおいしいところだけもっていかれている現状がある。そして、それまでは教師が進めているのである。つまり、教育活動が虫食い状態になりつつある。そうではなく全部教育すべきであり、まるごと教育することが教師としての生きがいなのではないかと思う。

説明文で学級づくり

丘の上で赤い花が三本咲いています。

右の文章を読んで、次の問いに答えなさい。

1花はどこにさいているか

2花は何本ありますか

3どんな花ですか

4花はうつくしいですか

解きながら、分かったことは交流・共同で理解させる。いろんな部分切り口切り刻みからから文章をきってみることが授業である。また、低位の子に過不足なく読み取らせ、発表させることでどの子も伸ばしていく。だが、気付いたことをいってごらんと聞いても言えないときがある。これがしつけであり、言語をゆたかにするチャンスでもある。説明文を書けるようにするために学ぶという目標をもって取り組ませたいものである。大人にとっては当たり前のことも、子どもにとっては当たり前ではないという認識を教師がもっているかどうかで子どもの伸び方も変わる。

局長だより　11月

◇学力研最新情報　岸本　ひとみ

●負担軽減と学力保障

　世の中は「教職員の負担軽減」のために、いろいろな試みが為されています。教科担任制、チーム担任制、午前中５時間授業……。何か新しい試みが出てくると、マスコミもこぞとばかりに取り上げて、喧伝してくれます。

　けれど、何かが違っているとは思いませんか？私たちの仕事って、「できた！」「わかった！」と、輝く笑顔の子どもたちから、エネルギーをもらって、自分自身も輝けるものです。この「できた！」「わかった！」の日々が、学校が楽しいとなって、荒れや逃走とは無縁の生活になる一番の早道で近道のはずです。いわば、王道ですよね。

●先生の数を増やして！

　今年、私のクラスは２１人。去年は２４人でした。１年生ということもあって、放課後になると、プリントやノート、ドリル類の丸つけをしなければならないものは、ほとんど残っていません。

　授業時間内に、丸つけをして、その場で直して持ち帰るのが日常です。子どもたちも、「あっ、そうか。」と、気がついてすぐに直す方が、よくわかります。１００点になったプリントや、訂正済みのノートを持ち帰るので、保護者の方も安心のようです。２１人学級で、持ち時間２３時間（音楽のみ専科）だからこそできることです。

●学習指導要領の大幅改定を！

　もうひとつ、私たちを縛るもの。週当たり時数を決めた「学習指導要領」です。スクラップ＆ビルドとはほど遠い、脆弱な体制（教員も学校も子どもも）の上に、ビルド＆ビルドの指導要領ですもの。歪みが出て当然でしょう。

　子どもたちの輝く笑顔と、教員の幸せのために必要なのは、この２点。とてもシンプルなことです。

◇事務局だより　岡本　美穂

■冬の学習会開催決定！

１２月２２日(日) 13:00～16:30

　教師になることよりも、教師であり続けることが難しい時代。しかし、希望はあるはず。日々の子どもとの関わりや学力づくり、学級づくりのこと、また働き方や保護者とのやりとりなど、様々なことを考え、ちょっとした「勇気」「励まし」「指標」が見えてくる会です。

参加者の皆さんと作っていく「冬のフォーラム」です。

１３：００～あいさつ

１３：０５～１４：０５　教師の力量形

１４：１０～１５：１０　教師教育の復権

１５：１５～１６：１５　現在の教育への提言

https://www.kokuchpro.com/event/fb4b3976833ec1d75b7d917f23a5a273/

●第１８期先生のための学校

■１１月９日（土）オンライン ZOOM　無料

https://www.kokuchpro.com/event/d2a674fb0af4c64c1fdd544f63ac4a20/

講座　１書くことが楽しくなる魔法の言葉～意欲を高める一言の価値を意識した指導～

福島　尚

講座　２体育の授業で子どもを育てる～学びのプロセスの転換・生涯スポーツの実現をめざして　　丸小野　聡暢

講座　３「学級活動や学級会など自治を育てる取り組み」しあわせな学級づくり～みんなで〃できた〃を増やす授業づくり

李　詩愛

講話　学校長　　久保齋

■１月１８日（土）会場　（たかつガーデン）会場費：1,000円

https://www.kokuchpro.com/event/5713995fe1bc5a47dc91be44d9ae92ff/

■２月８日（土）オンライン ZOOM　無料

https://www.kokuchpro.com/event/9d77ae09ace6017c3ba57e8766d4af4c/

学力研カレンダー

≪各地のサークル・部会　２０２４年　１１月　例会、イベント≫

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしています。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

11/

１６（土）みなみ学力研　9 時半～12 時　阿倍野区民センター　図書 nobu580701@yahoo. co. jp
２２（金）春日井学力研　18 時半～　レディヤン春日井(JR 勝川駅)　山口 080-6904-1697
２３（土）大阪教育サークルはやし　午後　エルおおさか　荒井 aik28501@bca. bai. ne. jp
２９（金）いろえんぴつ（加印）　18 時半～　天満南小　サークル室　岸本 090-9117-6330
２９（金）伊丹学力研　18 時半～　※阪急武庫之荘駅近く　前田 090-9715-3830

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等はご連絡下さい。

○　持ち方書き方研究会　ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を　前田 090-9715-3830
○　神奈川学力研　は　しばらく休会します

《全国キャラバン等　今後の予定 》

○　学力研・先生のための学校【全６回】

8月25日（日）　13時半～16時【済】　9月14日（土）　13時半～16時【済】
10月12日（土）　13時半～16時【済】　11月9日（土）　13時半～16時
2025年　1月18日（土）　13時半～16時　　2月8日（土）　13時半～16時
対面講座：8月（エルおおさか）・10月・1月（たかつガーデン）

○　学力研　1年生講座　第9回　11月23日(土・祝)　オンライン

○　学力研・冬のフォーラム　12月22日（日）　13時～16時半

会場：たかつガーデン（近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目より）
テーマ　「　教師であり続けるために　」

（詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで）
（講師派遣希望、サークル情報などは　事務局へ　079-426-5133）

※急に涼しくなってきました。暑い夏が長く続いたせいか、寒暖差が激しくなると、身体が不適応を起こして体調不良になりやすいです。この前、私はインフルエンザにかかりました。みなさんもご自愛ください。

ご意見・ご感想は下記まで　荒井　賢一　E-mail　aik28501@bca.bai.ne.jp
李　詩愛　E-mail　iwamotoshie@gmail.com
堀井　克也　E-mail　katsuya4k1h9@gmail.com